



志友会報

802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13
(株)網武出版 093(962)7740 FAX093(961)8224
Eメール: saigo@skyblue.ocn.ne.jp

本紙の年間購読は本体3,000円+税です。

合気語録

門外不出について

私が、山下芳衛先生の大東流に触れたのは三歳の頃からであったが、それは遊びの域を出ないものであった。幼年期に、こうした高度な武技を学んでも、持続できる訳がなく、結局、本格的に大東流に打ち込んだのは中学生になった頃だが、その稽古が激化の頂点に達し、単なる稽古が、筆舌に

尽くし難い猛稽古に変わったのは、高校から大学にかけての頃であった。当時の稽古は朝晩の、毎日二回だった。一日も休むことは許されなかった。朝六時には、先師(当時山下先生を、尊敬を込めてこう呼んでいた)の稽古場に顔を出し、そこで小一時間半程の稽古をした。

しかし一言で、小一時間半といつても、大変長い時間だったように憶えている。朝は一時時間半。夜は学校が終わる三時間の稽古で、その一つ一つが激を極めていた。

そして勿論、朝の稽古に参加するためには、単に五時半頃に、このこと起床し、寝衣を脱ぎ、稽古に出向けば良いというものではなかった。

私は中学三年の夏に父を病気で失い、いわゆる貧困の母子家庭の子弟として育った。そのため、金銭的には困窮しており、私が働いて、家を支えなければならぬという状態にあった。

中学の卒業間際、高校に進学することを断念して、卒業後直ぐに働いたらどうかという意見を、親戚筋からも、周りの者からも、耳にタコができるほど、何度も聞かされ、説得されたことがあった。中学の頃まで、父は八幡製鉄の下級の職工として働いていたので、父が定年満期を待たずに病死したことで、その子弟は、希望すれば、自動的に八幡製鉄の職工として、その後を継ぐ申し合わせが、会社との間に出来ていた。

稽古が中心であり、雨天の日は枯れ木立を打ち握るなどの、自学自習的な、主に剣術の稽古が主体だった。あるいは当身拳法である、突きや蹴りを数千回という回数で、打ち続けたことを記憶している。軒から落ちる雨垂れを相手に、何千回何万回と、わが意識が遠くなるほど、打ち続けたものである。

先師との稽古は、手取り足取り教えられるものではなく、先師の業をこっそりと盗むというもので、ただただまじまじとすることを憶えている。また秘伝の何がしか

を授かるときは、齋戒沐浴して、全身を清め、紋付袴に改めて白足袋を履き、身を正したものであった。昭和三十八年当時、戦後の平和主義や平等主義の世相に飽き足らず、私のような古武術に打ち込む青少年が少なからず居た。いわゆる一端の、自称武術家を気取る熱狂的な、純粋な気持ちで、こうしたものに打ち込む稽古仲間が居たのである。

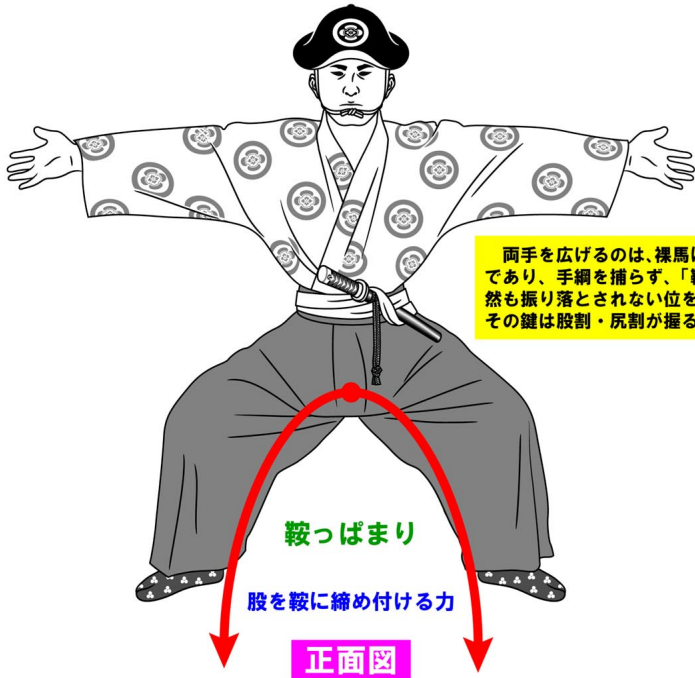
ところが日本経済は高度成長の真つ只中にあり、時代が目紛しく変化の中で、人々はこうした時

合気に通じる耶和良之術

その二



側面図



正面図

両手を広げるのは、裸馬に乗る場合の鍛練法であり、手綱を捕らさず、「鞍っぱまり」をして、然も振り落とされぬ位をつくる為である。その鍵は股割・尻割が握るのである。

最も大事なものは「鞍っぱまり」である。つまり馬の背中を、鞍を通して捕らえ、股割・尻割して開脚し、横から見ると「出ツ尻、出胸」にしてこの鳩胸の垂直に腰を据える事である。

乗馬に大事な股割・尻割の鍛練図

イラスト/曾川 彰

ここで非常に重要な事は、内田三郎家吉のような大剛の男を、馬上で刺殺する事が相撲のような力技では決して出来るものではないと言ふ事だ。また柔道のような組み入りの剛

力でも出来るものでない。耶和良之術は後世に、剣の真技として起源する「柔術の手」が、当時既に「組打の極意」として、高貴な身分の武家には「秘伝」として伝えられていた。彼女は朝比奈義秀の母であり、義盛が強い子供を生ませる為には、巴を取ったのは事実であるが、しかし彼女が決して非力の女性であったという分けではないよつた。

西郷派大東流合気武術総本部

大晦日正月はHome Pageで小説『旅の衣』を読もう!

<http://www.daitouryu.com/syoudoukan/>

小説『旅の衣』は、西郷派大東流合気武術 曾川和翁宗家の青春時代を小説化した特異な青年の群像である。あの全共闘が暴れ廻り、当時の世相を赤化して、革命一色で染まりつつあった1970年代、人々は何を考え、何を行おうと未来を夢見ていたのか、そうした青春の群像の中に曾川宗家も居た。この小説『旅の衣』はそうした世相を背景に、その時代を生きた一人の男の実話を元にした物語である。